

# 大江健三郎の『下降生活者』における「ホモソーシャル」な力関係

デヴリム・C・ギュヴェン

## 要旨

1994 Nobel laureate Kenzaburo Oe's short novel *Kakoseikatsusha* (1960) (Falling Man) portrays at first a deliberate, then an unavoidable, "fall" of a prestigious assistant professor at a government university in Tokyo. Betraying his rural origins including his family members, as a result of a rapid and successful ascent, he experiences an identity crisis which forces him to suspend this ascent. Such a "fall" accompanied by a homo-social solidarity and collision which constitutes the main theme of this novel reflects remarkably contemporary socio-political developments of the era which the novelist was a part of. As is the case of Oe's other works, the theme of sexuality is used as a metaphor for socio-political and international power relations; with a difference though in this short novel, being the adoption of the theme of *homo-social*, solidarity and rivalry between men throughout the struggle for power in a hierarchical social and/or international system.

キーワード：ホモソーシャル、性と政治、力関係、上昇と下降、支配層と被支配層

## 1. はじめに

『下降生活者』(1960年)は、九州の農村の商家の三男といった社会的な位置から、東京の官立大学助教授の地位まで「昇進」していった、そしてその時点を境にした突然の「方向転換」によって「下降」する欲望に駆られた「僕」の「墮落」を物語る。いかにして路地で「彼ら」/男娼たちの「見張り役」まで地位を失ってきたのかという謎が徐々に明らかになる道程が作品の筋をなす。したがって、小説の題名は「下」への方向性に焦点を合わせつつ、当然その構造が「上下」という二項対立的な運動によって構成されていることを示している。この論文では「上昇」と「下降」といった物語的動作がどのように機能し、それがストーリーのレヴェルではどのような意味を持っているかといった問題点を取り上げることにする。『下降生活者』において「下降」・「上昇」と、「男色/同性愛」といった二つの異なるモチーフがどのようにして縫い合わされているのだろうか？

## 2. 「上昇」と「下降」という設定

### 2. 1 「下降」の相対化

主人公の「僕」は、「上京」し、優秀な大学に「登校」するようになり、大学院を卒業してから「官立大学」の若い助教授のポストを獲得した。また裕福な名誉教授の娘と結婚の絆を結んでいる。彼は商家の三男から「村の希望となる」ようになり、三位から一位に「昇格」してきたわけである。こういった立身出世の方針は明白な「上昇」である。それに対して、「僕」が後にした故郷の村の人々にはそのような昇進の可能性が存在しない。

そこで僕は《希望》だった。僕は農村に寄生している小さい商家の三男だ。僕の小学校の同窓生は、百姓になるか、日雇いの入夫になるか、または性格破産者として追放されるように村を去り、筑豊の中小炭鉱地帯に埋没するか、自衛隊員となるかのいずれをえらんでしまった。(334)

「僕」にとって故郷の村人たちは、「他の生物体に依存して生活する」「生き物」程度の価値しか持ち得ない。故郷の住民は上記の引用文で否定面だけが強調されることによって低く評価されるが、ある特定の中心から外部へと追いやられる、あるいは、表面から深みへの動きを表す記号群が「下降」のイメージを築き上げるのである。その上、女子大学出の娘と彼女の「実家の費用で豪華なホテルに百名をこえる客をまねいた結婚式(335)」に、その百名とまったく異なる百姓と共存する母を招かないのは、彼にとって当然のことだ。老年をむかえており、まもなく他界する宿命にある母親について彼がつく嘘さえ「下向き」的な内容を暗に示している：「僕の生家は地方の没落した旧家だと信じ込ませた(335)」。

だが物語は、一方向で進むのみではない。「下」方への運動に対して「上」方への運動が存在し、この二つは常に交差する。「僕」の故郷は「山村であり」、その高い位置を去る人物は「性格破産者」や「僕」の弟のような「自衛隊員」、従兄弟のような警官になるものばかりである。「自衛隊員」と「警察官」を「失敗者」として叙述することによって、権力の「暴力装置」のシニフィアンである公務員としての「自衛隊員」と「警察官」が過小評価される。したがって、寒村を国の中央／東京と対置させる語り手の価値基準と先述のネガティブな「田舎」のイメージとは遥かに相違するということになる。主人公のあらゆる「上昇」運動は、他方で墮落／衰微でもあり、あたかも彼は山村というエデンの園／田園から追放される宿命にあったように表現されている。村を立ち去るのみならず、大学へ通うこと、そして名誉教授の末娘と結婚することは、「知恵の実」を味わったことと似通っており、楽園に住まう資格を奪われた主人公にとっての東京は「呪われた地」のようなトポスでしかない。なおかつ、「故郷の村の中学校長と村長から、精神的後援会をつくりたいという申し出(334)」、換言すると田園／「故郷の家」からの「誘いかげ」を拒否するとなると「僕」は楽園の門に錠を下ろしたことになる。

そうすると都会とは「牧歌的な農村の喪失」である一方で、「失敗者」の地でもあるし、他方でそこに移ってきてから、テンションの高いエリート性への「階梯」の「登山」をすることは必然的に下落とならざるを得ない。そこで田園から東京への移動とは「上京」でなく「下京」に「方向転換」するわけだ。

## 2. 2 「下降」に対する欲望——「中心」から「周縁」へ

なお、「僕」の心に「破壊」の危機感による「下降」の欲望が突然浮かんでくるのは、位置的に頂点に到達した直後のことである。男娼のための「見張り」として働く物語内の時間より1年前の夏の初めに催された学会で成功を取めた時、ある種の危機感・破壊感に苛まれるようになってしまう。酒、睡眠薬や麻薬でこの憂鬱を解消しようとするが、やがて上昇を「停止」しない以上これらのみで懊悩を免れ得ないことに気がつく。

僕はこの不安からときはなたれるためには、上昇の階梯から降りなければなるまいと感じ、それが僕の今までにつくりあげ武装をかためた秩序の城を破壊しつくすことであるのを感じた。(341)

そして「僕」が繁華街のあたりの路地で「客」を待っている若い男娼に声をかけられると、そういった「下降」／「墮落」への入り口にめぐり会えた。それに、この場面は「中心」から「周縁」へ、「西」から「東」へという方向性で記述されていることは注目すべきところである。

(…)僕は洋書店を出て、混雑した繁華街をつつきろうとしていた。そして激しい強弱感にとらえられ、西日にむかってあるくことに耐えられなかった。僕はほとんど目をつむって路地に入りこみ混雑のすくなく感じられる方向に逃げまどうような気持ちで足を運んだ。(342)

この時点から、「僕」の「つきあっていただけませんか？男同士の同性愛です」と声をかける若い「かれ」との関係を契機に「下降生活」がはじまろうとする。「ああ、喜んでつきあうよ！」(342)という「僕」の返事の言葉をもってこの二人の男の間に一時的に結ばれる「絆」は、小説の「上下」といった物語的運動に「同性愛」のテーマを導入する。

## 3. 「ホモソーシャル」と「ホモセクシュアル」の融合と分裂

### 3. 1 大江健三郎の作品における「性」の意味

大江健三郎はアメリカの作家ノーマン・メイラーの「セックスは、おそらく十九世紀と二十世紀の初期の小説家によってまだ掘りつくされていないでいる、最後に残った開

拓分野だ<sup>1)</sup>』といった『僕自身のための広告』という著書での発言に刺激され、「性」を「政治」という要素と絡み合わせた形で扱うことにした。つまり大江は「性」を政治の比喩として用いる一方で、それを通じて「読者の頭、意識を刺激して敏感にし、目覚めさせ、過度の覚醒状態にみちびき、反抗的にし、直接的、具体的ではなく、観念的に読者を高揚させること<sup>2)</sup>」を目指した。「人間を、そして世界を描く手段として性を用い<sup>3)</sup>」、つまり社会政治的な現状を把握するための「方法としての性」をはじめて小説に応用したのは最初の書き下ろし長編小説『われらの時代』(1959年)においてである。しかし、当時の日本の読者や批評世界はこういった独創的で、かつ画期的な試みには心の準備はできていなかった<sup>4)</sup>ことが明らかになり、この作品は酷評の的となってしまった。こういった一時的な危機を、「性と政治」の関わりや文学における「性」の役割について執筆した「われらの性の世界」(1959年)をはじめとする、一連のエッセイによって乗り越え、それ以降も「性」というテーマに固執しつづけたことが周知のとおりである。そこで、大江における小説やエッセイの相互補完性とはこうした批評世界の視点を修正／再整理する必然性から生じたものであるといえよう。

これ(『われらの時代』)は大半の批評家から色情狂の失敗作とみなされた。そして1964年の『個人的な体験』にいたって、すくなくとも性的なるものに関わるかぎり、批評家から、玄關ばらいみたいな冷たさで否定されることはなかった<sup>5)</sup>。

大江が、安保条約体制下にある日本や、日本の青年のありさまを具象化するために用いたもつとも効率的なパターンとは、(一)絶対者と、(二)その「絶対者を拒否し」、「他者と硬く冷たく対立し抗争し、他者を撃ちたおすか、あるいは他者を自己の組織のなかに解消して、その他者に他者であることをみずから放棄させる」「政治的人間」と、(三)「他のいかなる存在にとつても他者でありえない」、「絶対者を膾が陽根をうけいれるようにうけいれ」、「牝が強大な牡に従属するように従属し」て、「そしてその受容と従属の行為」に「性行為がそうであるような快楽を」覚える「性的人間<sup>6)</sup>」というものである。ところが、『下降生活者』においては作家が当時の日本青年の政治的無関心による停滞や政治的「不能」を「性的人間・政治的人間」といったパターンのみを通じて表現するよりは、「結婚」というテーマを取り込んだ形で「男同士の連帯・競争関係＝ホモソーシャル」といった新たなテーマを繰り広げている。性行為を排除する「結婚」という「反セックスの城<sup>7)</sup>」とは、社会的ないしは国際関係的なレベル<sup>8)</sup>での力関係の体制に組み込まれるための装置であり、その体制のヒエラルキーの中で「上昇」することも、「下降／転落」することも可能である。

### 3. 2 男同士の「ホモソーシャル」な欲望

「僕」の九州の山村から東京の学術世界への移動が、家父長的な空間から、都会的な

「男同士の『ホモソーシャル』な空間」への移行を意味していることはいうまでもない。田園では「上昇」の可能性は父権を持つ長男に譲られており、三男にはそういった僥倖は与えられていない。そこで、イヴ・K・セジウィックの『男同士の絆』<sup>9)</sup>を参照にしつつ、都会特有の「男性的ホモソーシャル」論を踏まえて、競争の激しい都会空間における「僕」の位置を規定することにしよう。その前にセジウィックの言葉を借りながら、「ホモソーシャル」という概念を定義する必要がある。

「ホモソーシャル」という用語は、時折歴史学や社会科学の領域で使われ、同性間の社会的な絆を表す。またこの用語は、明らかに「ホモセクシュアル」と類似を、しかし「ホモセクシュアル」との区別をも意図して造られた言葉である。実際この用語は、「男子の絆」を結ぶ行為を指すのに使用されているが、その行為の特徴は、(中略)強烈なホモフォビア、つまり同性愛に対する恐怖と嫌悪と言えるかもしれない<sup>10)</sup>。

男性の「ホモソーシャル」と異質的に、女性の同性間／連帯的共同体の場合は「<ホモソーシャル>対<ホモセクシュアル>という弁別的対立は、遙かに不完全であるし、二項対立的でもなく、「女性同性愛とそれ以外の女性同士の絆」つまり母と娘の絆、女同士の友情関係、や「フェミニズムの活発の闘争など—は、目的・感情・価値観を軸にして明らかに連続体を形成している。その連続体には、極度のホモフォビアや人種・階級間の軋轢などの深い亀裂が認められるけれども、連続体そのものが現在ではまったく常識のように思われる。」<sup>11)</sup>つまりこの定義は、ほとんど男性的「ホモソーシャル」の連続体が逆さまにされたバージョンであるといえる。

『下降生活者』の「僕」は、大学入学以後首都東京における強烈な競争に突入するが、都会で「官立大学の文科系基礎学部」助教授に昇格し、そして、故郷では村人たちの<希望>になってから不思議な戦略方針をめぐらす。この若い助教授と、学生たちの間における年齢の差はわずかしかないのにもかかわらず、彼らに対して「僕」は自分を「他人」として位置づけることにする。そういう意味で「僕」は他の若い教員とずいぶん異なるスタンスを取り、特別の「ホモソーシャル」な欲望を抱いているようである。他の「若い同僚」は、学生たちと「友人同士」の絆を結び、彼らの些事の問題のために奔走する。そのほとんどが同性である学生と教授の間におけるこういったやり取りは、不均衡な関係に変容し、学生たちの「上昇」の上で先生たちは搾取されているというような結果になるものである。

「彼らはもう取りまきの学生を満載して港を出た船なのだ、舵は学生たちが取っている」(331)

この箇所では、「ホモソーシャル」範囲内における「覇権闘争」が顕著である。そして、つ

いに、「同」の表記文字で築かれた均衡的雰囲気も突然崩壊せざるをえない。

「もう自分の自由の回復のためには沈没する他ない。学生たちが溺死せず、他の船に乗り換えることを絶望的に祈りながら。(同前)」

「学生層のための人生案内のような」書物を発表し、若者を「上昇」させるため、彼らは「専門の学問の時間を失っていく」という「下降生活」を送るようになる(「沈没は目のまえにせまっているわけだ」同前)。「僕」はここにおける「距離維持」の重要性を受け止め、その上で新しい戦略を立てる。彼は、「学生運動の牙城で」ありつつ、他方で「アカデミックな選良意識の強い、厭ったらしい勉強家」も多い大学の「男性的」競争空間の中で政治的な昇進を目指すことの危険性を見極め、「上昇」のため、まず年齢的に自分と五、六歳しか離れていない学生たちとのあらゆる接触を控える「衛生的」な立場をとることにする。

僕は教室で可能なかぎりアカデミックな幻影を真面目な勉強家に抱かせる講義を熱心におこなった。(中略)学生たちといかなる交渉も持たなかった。(中略)彼ら(若い助教授)の少壮の進歩派たちがおたがいの誠実な外貌のかげに隠している負いめの感情、ひけめの感情からも自由な男として、かれらから一目おかれたわけだ。(中略)学生たちとの生活に肩をいれてつきあうことの労苦を厭うエゴイズムを、このストイシズムとアカデミズムの二つにすりかえることに成功したのだ。(331、332)

「僕」はこうして、学術空間においてあらゆる交渉を拒絶し、ストイシズムによって自由にアカデミックな「上昇」を推し進めることができる。つまり「他人」とされるのは、既述の農民のみならず、東京のエリートの大學生たちや、同僚たちでもある。

### 3.3 「ホモソーシャル」から「ホモセクシュアル」な絆へ

「接触の回避」とは、無論、決して「ホモソーシャル」な欲望の欠如をいうものではなく、逆に、エゴイズムの形を取った「上昇」／「権力への欲望」を「ストイシズム」や「アカデミズム」へすり替えるということである。つまり心理学的に再定義するとリビドーを「性的でない」対象へ向けるという「昇華」(Sublimation)のプロセスであるといえる。主人公は、「権謀術数」的なやり方で、接触の拒否政策を通じて、自分の位置を更なる高い位置へと昇級させようとするが、その上で「反セックスの城」としての名誉教授の娘との結婚が、非常に役に立つ手段となってくる。

「僕」が男娼と性交をしてから二人の間には「師弟の絆」のような関係が結ばれるようになる。これは一見、二元的な関係のようであるが、ほとんど不可視の「妻」という作中人

物が彼らの関係において重要な役割を果たす。したがってヨーロッパ文学の典型的なパターンをなす「性愛の三角関係」(Erotic Triangle)がこの小説においてうかがわれるようになってくるわけである。主に「性愛の三角関係」とは二人の積極的なライヴァルと、彼らが望む受動的な女という形で進行する。セジウィックはルネ・ジラルールの「性愛の三角関係」、「愛の主体と対象を結びつけるより、ライヴァル同士の絆のほうがずっと強固であり行為と選択を決定する」という理論を取り上げる。このようなアプローチは性差の重要性を見落とす「対称性」といった欠点を抱えつつ、男性同士の「ホモソーシャルな欲望」と「ヘテロソーシャルな欲望」はどのように刻印しあうのか<sup>12)</sup>などの問題の把握の上で便利な図式でもある。そして、これはフロイト的な図式に依拠する。

(省略)男児が正常な発達を遂げて異性愛者となるためには、「陽性」のエディプス段階を経なければならない、(中略)具体的には男児が父と同性愛的同一化を、父への女性的従属を行うことである。この理論によると、男児が逆に同性愛者となるには、父が不在か、あるいは父との関係が疎遠であること、加えて、男児が異常なまでに極度な母との同一化を経て、その同一化で父の代理となることが必要条件として挙げられている。この図式から得られる結果は、二つの正反対なもの驚くべき中和作用であろう<sup>13)</sup>。

リチャード・クラインの上記の解釈も、セジウィックが主張する通り、主体を男児と固定させ、女兒の場合も同様であるとしたことからすると、先述の理論と共通して性差に対して鈍感であろう。双方の論者とも「三角関係を構成するものたちの間の性差による権力差が生じて、三角関係は比較的影響を被らないと考えている」<sup>14)</sup>ようである。そうすると、この図式は、『下降生活者』における「三角関係」を読み解く上でもっとも適切な模範としては用いられ得ないものの、これを参照にすることがより広い観点をあたえられると思われる。

「僕」の感じる危機感とは主人公の「自己」に制限されるのみの苦難ではないことは341ページの場面において明らかになってくる。時には電車で会う鬼のような、墮落した男との遭遇の際、この「男たちは、不安から解放された僕の自画像を僕に啓示した」ように感じる。それに、妻と新劇を見に行く途中でそのような男に会うと、「僕」は「妻」の反応を観察してみる。「妻は嫌悪にたえない顔をし、その男をむしろ憎悪のこもった眼で睨みつけていた」時点で、「僕」は安堵感を抱くわけだが、これは事実上彼の危機感が個人的な問題ではなく、「男性性」全体を包括するような巨大な「破壊の危機」であることに気がつくからである。つまり「僕」は自分を威嚇するのが「社会」そのものであり、それは女としての「妻」に象徴されていることを実感してしまう。彼はこの二つの同一化体験の後に、若い男娼にめぐりあう展開となる。

「上昇」のための「ホモソーシャル」な接触回避による抑圧は「僕」を「性的倒錯」(343)に導きいれたわけで、極端な接触によってホモセクシュアルな関係が結ばれる結果となる。しかしながらこれは単なる売春体験にとどまらず、ある表象的な「ホモソーシャル」の絆を構築する試みでもある。中世から近世にかけての「少年愛」が武士階級には自由であった時代の復古によって、ホモフォビアを抜きにした「ホモソーシャル」な共同体は築きあげようとされる。これは「かれ」にとっても、主人公の「僕」にとっても「欲望」に動機付けられる「同一化」の形で進行する。

### 3. 4 ホモソーシャルの絆の分裂

しかしこの「同一化過程」は屈折した形／非対称的な形で展開していく。性行為の後男娼が「僕」の身元に関する問いを継続的にかけて、「僕」は最初の質問への返事として、同僚や「妻」とさえ分かち合わなかった情報を「かれ」に与え、山村出身であることを告白するのである。これは文字通り現在の自分と、「本来の自分自身」との同一化であるにもかかわらず、続いて回想の深層から浮かび上がってくる二人の他者との同一化でもある。(一)A：学生運動に加わって「出世コオス」から外れた「区役所員」。Aとは、1955年9月13日の立川基地拡張測量に反対する地元住民らが警官隊と衝突した事件<sup>15)</sup>が起きた砂川で「警官に頭を割られた衝撃から強度のノイローゼにかかり」、ついに活動家の仲間にも見捨てられたものである。Aは大学生の時代に「『無関心派』に近かった」(345)「僕」の知り合いであり、「僕」は、最近彼に対して「心の隅にいつもチクチクする痛みと」街で会うと「限りない」優越感を抱く(344～46)。(二)B：Aのように「宙ぶらりんで三流の業界紙の記者」であり、アラブ民族主義のリーダーのナセルの軍隊<sup>16)</sup>に加わろうとして香港まで密航して、病気になって帰ってきたもう一人の「ナイーブな失敗者／ドンキホーテ」である。Bの新しい計画は、アメリカの傀儡政権のバティスタ独裁政権が転覆され、フィデル・カストロによる新(革命)政権が確立された直後のキューバへ出発することである(355)。

つまり彼は「架空の僕」と呼ぶ自分の「分身」を作り上げ、それを通じて自分の地位を「下降生活者」のレベルに下げた形で、「かれ」と話し合っているようである。そして、こういった、AとBの現実の他者らをモデルにする偽りのアイデンティティらを「僕」は現在のアイデンティティの正反対である「架空の僕」(「分身」という人物の「イメージ」に刻み込み、それを補強するのである。こういったカタルシス的な「告解」<sup>こくかい</sup>行為が一方で、若い男への追従すべき「模範」としての役割を果たす。また「僕」は「かれ」の「崇拜」(同一化)の対象になってしまう。

「あなたは、真の意味で、充実しているということを理解している人だ、充実した生活、充実した人格、それを持っている人だ、男らしい人だ」(346)



「人間仲間の愛です、と僕は今、あなたにいいたいんですよ」(348)

つまり、男娼からすると、匿名や偽造の人格の裏に隠れる、理想的な師匠である「僕」と「かれ」の関係とは、同性愛を取り入れ、ホモフォビアを排除することに基づく「ホモソーシャル」な共同体といったユートピアの表象的な現実化のようなものであろう。「同性愛的性交によってさらに男らしくなる」という「かれ」の逆説的な供述は、女性に対して排他的な態度の間接的なあらわれなのである。殆ど前景化しない「妻」、「かれ」と「僕」からなる「性愛の三角関係」では、「僕」が主体であると同時に客体でもある。「妻」=社会と「かれ」を相互不可視のままに保持し、その二人の接触を警戒する。他方、「かれ」の目を通しては牧歌的なファンタジーの対象でもあるし、「妻」=社会によって吸収されることを恐れるのもある。セジウィックによれば「男が男と関係して侮辱的变化を被っても、まだ自分は男性権力を保持、あるいはそれに参画していると感じられるが、女の関わりで変化を被ると、実体が根本的に墮落したと感じられるのである。」<sup>17)</sup>

『下降生活者』的な「性愛の三角関係」では、テンションが男同士のライヴアルの男らの間ではなく、主人公の心中において展開するのである。「妻」=社会が彼の「性的倒錯者」であることを発見する(=「女性恐怖/Gynephobia」)ことと、「かれ」に「僕」の本当の身分つまり「同性愛嫌悪/Homophobic」の社会の上位に位置する一員であることが見出されること・・・これは、間もなく主人公にある種の分裂をもたらすことになる。

大学の山岳部に属する「かれ」は、「男同士の絆」に関してロマンチストの夢をする：「ザイルでからだをむすびあった二人なら生きて戻れるが単独登攀では死ぬ<sup>18)</sup>、という岩場を見つめます」(353)。こういったホモセクシュアルな接触に支えられた「男同士の(擬似の)連帯関係」といった「ホモソーシャル」な接触によって均衡を取れた「僕」はそこへ「かれ」と一緒に行く約束をするが、私立大学で専任講師としての最初の講義の後、「かれ」の声に呼び止められてしまう。幻滅の悲哀にさいなまれる男娼/若い私立大学生は彼に「二万円を求める」ものの、実は消費社会の墮落の徴である「金」には興味を抱かず、単独登攀に失敗し、墜落死するのである。こうして「性愛の三角関係」は三つの点に位置する人物の墜落/下降によって崩壊する。

墜落事故による「かれ」の死去/自殺の結果「僕」は「助教授」と「専任講師の椅子を捨て」、路地に下降・下落する。妊婦だった「妻」は人工中絶をし、「僕」と別れる。そこで、僕は今回必然的に「メタノイア/改心」をし、《架空の僕》よりも程度の低い生活を送るようになる。しかし、そもそも主人公の「僕」はなぜ「かれ」と関わっていたのだろうか？

#### 4. イデオロギーの問題

##### 4. 1 主人公の「上昇」のための「下降」という戦略

実のところ「僕」は「かれ」と関わるようになったのは自分の位置を維持する上でのイデ

オロギー的な戦略に過ぎなかった。それは小説の様々な箇所において顕著である。助教授の『僕』が不安からときはなたれるためには、上昇の階段から降りなければならぬまいと感じるが、それは「不可能な下降だ」(341)と考える。そして、「助教授としての自己を放棄するつもりも、「希望」であることをやめる意志(も)なかった。」(342)、「あの青年はおれの蘇えりのための霊媒かもしれない」(348)「この路地での《架空の僕》は現実の僕の不安の危機感の圧力を低く保つための安全弁であったわけである。」(351)

他方、セジウィックはマルクス主義的「イデオロギー」の一面を下記の通り導入する。

『ドイツ・イデオロギー論』において、マルクスは、イデオロギーの機能とは現状に存在する矛盾を例えば起源のある通時的物語に鑄造し直して(Recast)隠蔽することであると示唆する。この機能に呼応してイデオロギーは、それまでのシステムに内在する古い価値観を一見理想的に見せて肯定するものの、実は新しいシステムを擁護し古い価値観の物質的基盤を侵食するという重要な構造的特徴を持つ<sup>19)</sup>。

つまり、主人公は「かれ」を操る上で、自分を「他人化」／対象化する。次に「かれ」の前へ牧歌的に虚構された「ホモソーシャル」の復帰という模範を提出する。これは過去の古い価値観の物語化であるし、自分自身＝《架空の僕》をこの物語の英雄と位置づけることでもある。これは、「墮落的」な都会的な空間つまり、東京を中心とするブルジョワ／消費社会への「代案」のように見える。だが、このような戦略とは「現状」を維持するための装置に他ならず、古いシステムの崩壊を促進させるという結果を引き起こすものだ。つまり師弟の絆に基づく家父長的、「ホモ嫌悪的ではない」「ホモソーシャル」な「武士共同体」のユートピアはこの過程の結果、崩壊することになる。いうまでもなく、これはユートピアでなく、擬似ユートピアであり、それを意識した者が、生き延びるものの、擬似ユートピアを本物のユートピアとして抱えようとするものは死／下降／墜落によって新しいシステムから排除されざるを得なくなるわけである。

#### 4. 2 スターリン批判・ハンガリー革命の影

こうした、都会的／中心的「ホモソーシャル」なヒエラルキー体制下における「上昇」「下降」運動というテーマを基にするこの短編小説は、その作者である大江健三郎が置かれた、当時の同時代的な文脈と密接に結びついている。『下降生活者』が『群像』に連載されたのは1960年11月であるが、主に1955年から1960年にかけての期間とは、国際的にも、国内的にも政治色が徐々に濃厚になっていって、ついに、6月15日の安保条約反対デモの際の国会突入をもってクライマックスに至った年代であることはいうまでもない。そこで作家が1960年と自分自身の不思議な関わり方について次のように述べる。「ぼくは政治的なタイプの人間ではないが、1960年6月前後は、そのぼくはもっとも深

く政治的なウズマキのなかにはいりこんでいた時期だった<sup>20)</sup>。

「上昇」と「下降」という二項対立的なパターンは、支配者／支配層と被支配者／被支配層のダイナミックな関わり方をあらわすものであるので、当然「下克上の」あるいは「革命的」運動といった意味合いを孕んでいるわけである。「上昇」・「下降」としての「下克上の」な現象に富む60年代では、冷戦体制下の世界においてもっとも画期的な出来事は、1956年2月のソ連共産党第20回の際「秘密報告」のセッションで行われた、フルシチョフ(共産党中央委員会第一書記)によるスターリンの「個人崇拜」を酷評する演説であろう。ところが、これは、個人的なレベルにとどまり、一個人としてのスターリンの誇大妄想や被害妄想的な性格や、その性格による悪政に対する批判であり、スターリン主義的な体制に向けられた批判ではなかったということが、すでにイタリア共産党書記トーリアッティなどによって問題化されている<sup>21)</sup>。

ここで注目に値する点とは、フルシチョフが「上昇の階梯」を上りつづけるために、いったん「下降」することを必要としたことと、更に、自分もその体制の支配層に所属しており、しかも、スターリンの高級官僚の一人であったので、その「秘密報告」を「告解／告白」の形でおこなったことになる。このような「下降」的な行為によってフルシチョフがスターリン主義的な体制を維持し、そこを出発点にして「平和共存」などみずからの政策を実行させて「上昇」していくことを可能にしたわけである。「つまるところ、『ハンガリー事件と日本』の著者小島亮氏によるとこれは、「体制内再編を目指した一種の予防革命であって、(フルシチョフの)言葉の過激さに反比例して、本質的に保守的なものであった」<sup>22)</sup>。あえていえば、この報告は、「秘密」でありつつ、「東欧諸国」の現状維持のための、東欧諸国を対象にする「告白」／報告であったのであろう。他方、『毎日新聞』は(1956年2月19日)スターリン批判(無論その段階ではまだフルシチョフの秘密報告の全文をはじめとして、それに関する詳細な情報が獲得されていない)を報道する際「スターリン、地に落つ」という見出しを一面トップに付けたが、無論このような「下降」が、日本の左翼に甚だしいショックを与えたことは想像にかたくない。

『下降生活者』の、自分自身や自分の左翼運動家の友人に関して、若い男娼／私立大学生に告白／「告解」をする「僕」という設定と、スターリンの「個人崇拜」をめぐる告白／報告を行うフルシチョフという現実の世界からの設定とは、紛れもなく顕著な相似を呈している。他方、スターリン批判に刺激され、1956年10月に暴動を起こしたハンガリーの労働者や青年の行動は、徐々に、ソ連を脅威にさらすような内容のものに変わり、ソ連軍との武力闘争まで展開していったのである。11月23日に暴動が沈静化された時点では2万人以上のハンガリー人と3500人以上のロシア人兵士が命を落としていた。スターリン批判後の東欧の国々では(最初の反乱は6月28日、ポーランドのボズナニ市に発生したノルマ増加反対のストであったが、全国に拡大しない小規模のものにとどまった)政治制度が改革されておらず、支配層と被支配層の間における溝・不和が深刻化し

ていった。そして、ハンガリーのスターリン的なリーダーであるラーコシなどに対して、被支配層が不満を抱いていた。しかし、ハンガリーの国民によるこういった革命・下克上の試みは、「新しいソ連」にバックアップされるどころか、厳格に弾圧されたのである。

「僕」が「若い男娼」／「学生」の「かれ」を相手に告白／告解を行うが、そのほとんどは虚構的なものである。「僕」は自分を、立川基地拡張測量に反対する地元住民らが警官隊と衝突で負傷した区役所員のAや、フィデル・カストロによる新(革命)政権が確立された直後のキューバへ出発しようとするBと同一化する。このような偽善に満ちた「告白」によって「僕」は、「架空の僕」という虚構的な人物を作り上げる。しかも、「かれ」は「架空の僕」の話を実事だと信じ込み、「架空の僕」を追従すべきモデルとして受け止めるようにする。「若い男娼」／「学生」のもう一人の「客」である、実際上作家であるにもかかわらず、毎回異なる匿名を使う(歯科医・工員・商人など)「作家」という人物がいる。「かれ」は、「架空の僕」とかなり対照的に見える—したがって本当の「僕」とはまったく相違しない偽善者である—「作家」の偽善性に腹を立てて、彼を殴ってしまう。

結局、作家と同様に匿名や偽情報(Disinformation)によって自分を不可視なもの(インヴィジブル)にしようとする「僕」も、「かれ」が夢見た通り「被支配層」に属するものでなく、大学の教官というエリートの位置を占めている人物であることを発見する。そこで、ショックを受けた「若い男娼」／「学生」の「かれ」が、まず「僕」を、「金」を求めて「恐喝」し、そして単独登攀に失敗して墜落死するといったモデルは、フルシチョフ／支配層に対して、ハンガリー的な役割を果たしているといえよう。とりわけ、「若い男娼」／「学生」が「作家」に対して暴力を振るうことは、スターリン批判を頼りにして、ハンガリーの国民が暴動を起こしたことと、また、「若い男娼」／「学生」が真実を知ってから「僕」を脅迫し、単独登攀に失敗して墜落死するという形において挫折に終わった個人的なレベルでの「蜂起」は、ソ連の軍部隊がハンガリー侵攻に対して発生した抵抗運動とその鎮圧と、それぞれ見落としがたい並行性を呈している。

こうして、スターリン批判やハンガリー暴動という歴史的な事象は、作家大江健三郎のこの短編小説に「影」を落としているといえよう。無論「下降」・「上昇」という運動は、キューバ革命や脱植民地化が進行しているアフリカといった国際的な次元で、また安保改定の審議会の際、日本社会党の議員が警察によって議事堂の外へ「つまみ出された」<sup>23)</sup> ことなどに見られるように国内的な次元でも、支配者・被支配者の下克上の相互作用は、ほかに、さまざまな形で当時の同時代的なダイナミズムを形成していたのである。

## 5. 物語言説的な問題：隠蔽された「性愛／権力の三角関係」

### 5. 1 「もう一人の語り手」の登場によって相対化される力関係

この小説を読み終わった読者をもっとも煩わせる問題の一つとは、もし「饒舌な」「僕」

という語り手／主人公が「僕の本質にもっともふさわしい形式が見つければ、僕は小説を書くか、戯曲をつくるかするだろう。しかし詩よりも何よりもしゃべることがふさわしく思われるのだ。」(328)と述べ、路地で「見張り」を勤めながら、しゃべることしかしないなら、そもそもこの短編小説は誰によって「文章化」されたかというものであろう。「文章化」の主体が「僕」でないことは、物語のエピローグもプロローグも、「語り手」によるこの体験を作品化したいという「欲望」の表現で確認できる。つまり、物語の終りに、作品化の「望み」に言及され、物語の始まりにも、同様なことがなされると、これは相互否定的な結論を生み出すのは当然であろう。「かれ」に対する罪障感や罪悪感に苛まれている「僕」が、饒舌の段階を越え、饒舌を詩・小説・戯曲のどちらかの形式で文学的な表現にすり替えることを望んでいる。『下降生活者』の主人公によれば、「その作品」は「次の一節で始まるだろう。《つきあっていただけませんか？つきあっていただけませんか？人間仲間の愛です》」。(360)しかしながら、この小説は、それとは異なる一節で始まる。「僕はアルコール中毒でもないし、麻薬中毒でもない、僕は饒舌だけなのだ。」(328)つまり「僕」は饒舌という「原始的な自己表現法」を文学的な表現に「昇格」させることに失敗したわけであろう。

いうまでもなくこれは、小説におけるもう一人の語り手の存在を暗に示す手がかりとなるのである。「僕」はある「寛大の日曜日」の日に路地に行くが、若い男娼はそこにいない。「かれ」の仲間に伝言を頼み、喫茶店で待つことにする。「僕」を探しに来た「かれ」は「怒りの記憶にゆさぶられながら」次のように言う。

「いま、厭らしい男を、げずやろうを殴ってきたんです。そいつは三十過ぎの作家なのですが、僕らに会いに来る時、匿名を使うのです。そして僕らに「おれは工員だ、商人だ」とかいう。今日そいつが僕になんといったと思いますか？おれは歯科医だけど、わいせつが趣味でね、といったんですよ。僕はあなたとの間に生まれた、人間仲間の愛について考えると黙っていられずに、そいつを殴りつけてやりました。」(352)

この場面では、「僕」が自分と同類の、「恐喝」／Blackmailabilityを恐れて匿名の裏に身を隠す、真のライヴァルの不可視な「イメージ」に直面する。それによって主人公がその日初めて「性的不能」を体験するが、ここにもうひとつの「性愛の三角関係」が前景化してくる。ところが、青年の死後、「見張り」となった「僕」は饒舌に誰にもかまわずしゃべるばかりであり、おそらくその時点まで顔を合わせたことのない「作家」に路地で会っても彼の本来の身分を認知し得ない状態にある。そこで、「作家」にありのまますべての出来事を語ってしまい、作家がそれを新しい小説の題材に用いたのであろう。こうして、ストーリーのレベルで長い間、支配／被支配の競争を有利な立場から操作してきた「僕」

自身は物語化されることによって作家の支配下に入り、彼が小説家としての「上昇」を促進する上で搾取されることになってしまったわけである。

## 5. 2 ホモソーシャルな権力構造のダイナミズム——『下降生活者』の同時代的認識

先述のような物語内の登場人物の間におけるホモソーシャルの力関係を解釈する上で改めてセジウィックの『男同士の絆』に依拠することにしよう。セジウィックは次のように述べる。

新しい社会的なないし技術的な展開がどう抑圧されたのかを説明するのに、陰謀説——全知ないし全能の、特定の一派や利益が抑圧を企てたという説——に依拠する必要はないと言えるだろう。とはいえ、種々様々な利益をいっしょくたにし、それについてまったく考えなくてもよい、というわけでもない<sup>24)</sup>。

若い男娼／学生の「かれ」との擬似の連帯関係を築くことによる「僕」の「下降戦略」は結局のところ失敗に終わったのは、陰謀説のみでは論理的に説明しきれないのである。なぜなら、「僕」・「かれ」・「作家」の間におけるホモソーシャルな力関係とは、より複雑で、よりダイナミックな構造をもっているからである。

男性のホモソーシャル連続体をホモセクシュアルとホモフォビアに可視的に二分する——それゆえ連続体全体を操りうる——力とは、まさに闘争の対象なのであって、ただ漠然と実体化された「現状」にあるものではない、と。どのような「現状」であれ、——特権を手にする人々の間でさえ——利益が対立すれば、社会の重要かつさまざまなイデオロギーも衝突することになる。そのため最終的には、いかなる「利益」であれ、当初の「目論見」通りの結果を得ることができないのであり、また、個々の「利益」は、権力の残留空間を——おそらく権力真空地帯さえも——なんとかしても領有しようとし、そして領有すると、自らも変容せざるを得ないのである<sup>25)</sup>。

「僕」という作中人物は「権力の残留空間を」「なんとかしても領有しようとし」、そして、それを「領有すると、自らも変容」してしまうことになる。つまり、「僕」と「作家」の位置は、「ホモセクシュアルとホモフォビアに可視的に二分する」ホモソーシャルな連続体によって形成されている力関係のダイナミズムの体制のなかで決定される。以前、歴史を表現する／「ゆがめる」力を持っていた「僕」の変わりに、「作家」が歴史を解釈する権利を掌握した。そして、これは、小説が発表された時点では明白ではなかったものの、1964年に（「僕」のように「百姓」出身であり、「僕」の村の男たちのように、炭鉱夫として働いた経歴を持つ）フルシチョフが支配層から被支配層に「下降」といった宿命を思

い起こすものでもある。そこで、大江健三郎という作家の先見性を認めるべきであろう。

- 1) 『ぼく自身のための広告』、「69年の問答」(新潮社、1962)
- 2) 「性の奇怪さと異常と危険」、329頁。大江健三郎、『厳肅な綱渡り』、(講談社、1991)
- 3) 篠原茂『大江健三郎文学事典』、(森田出版、1998、)61頁。
- 4) 「一般に、性的なるものの文学的役割をおとしめるタイプの論客たちの欠陥は、かれらが二十世紀における性的なるものの文学的正統の系譜についてすら、きわめて不勉強であることである。』『厳肅な綱渡り』、「第四部のためのノート」307頁。
- 5) 『厳肅な綱渡り』、「第四部のためのノート」305頁。
- 6) 『厳肅な綱渡り』、「われらの性の世界」、315～316頁。
- 7) 「したがって、結婚した青年は、結婚というものを、いわば反セックスの城だと考えることがある。」「結婚した青年は、性的抑圧から解放され、かれはもはや、自分の性器を、意思に反して欲望とつながる、半独立存在とは考えなくなる。たちまちかれは、永い禁欲期間について忘れてしまう。』『厳肅な綱渡り』、「結婚および死」、349、351～352頁。
- 8) 「結婚生活とは、その機能と本質において、社会生活の雛形なのだ。」同上、349頁。
- 9) セジウィック氏はこの著作でイデオロギーとセクシュアリティの相互作用やそれによる同性愛や女性弾圧・女性のマイノリティー化のダイナミックな装置を18世紀中葉から19世紀中葉にかけてのイギリス文学の分析を踏まえてとらえようとする。『男同士の絆：イギリス文学とホモソーシャルな欲望』イヴ・K・セジウィック著/原早苗、亀澤美由紀訳、(名古屋大学出版会、2001年)／Eve Kosofsky Sedgwick, *Between Men : English Literature and Male Homosocial Desire* (Columbia University Press, 1985)
- 10) 同上、2頁。
- 11) 同上、3頁。
- 12) 同上、32～33頁。
- 13) 同上、34頁。
- 14) 同上、34頁。
- 15) 政府はついに2000名あまりの警官隊を動員し、東京都砂川町の基地拡張予定地で強制測量を開始した。これに対して、地元の反対同盟とこれを支援する労組員らは激しく抵抗、夕刻までに反対同盟側の60人、警官側の33人の負傷者をだし、国鉄組合員3人が検挙された。
- 16) ナセル大統領1956年7月26日のスエズ運河の国有化宣言の結果、同年10月29日にエジプトが英・仏・イスラエルの襲撃を受け、その三国に対して行った反帝国主義的な第二次中東戦争／スエズ戦争のこと。
- 17) 『男同士の絆』、10頁。

- 18) いうまでもなく、物語のこのエピソードとは、1955年1月2日の「ナイロンザイル事件」とは無縁ではないだろう。
- 19) 『男同士の絆』、21頁。
- 20) 『厳粛な綱渡り』、「第二部のためのノート」95頁。
- 21) 『ハンガリー事件と日本』(中央公論社、2003)6頁。
- 22) 同上、8頁。
- 23) 『厳粛な綱渡り』、「民主主義は踏みにじられた」99頁。
- 24) 『男同士の絆』132～133頁。
- 25) 同上、133頁。